

## 中日友好と青年の使命

張 梅

司会（勘坂純市）：今日は中国大使館から、参事官であります張梅先生がお越しくださいましてご講演をいただきます。本年はご存知の通り創立者池田大作先生が1968年9月8日に日中国交正常化提言をされてからちょうど50周年になります。それから1978年に日中平和友好条約が結ばれて40年になります。非常に意義深い年になりますので、その間、創価大学では中国の皆さんと幅広い友好を広げてまいりました。その歴史を今日は学んでまいりたいと思います。最初に、私のほうから今日ご講演をいただきます張梅先生を紹介させていただきます。今中国大使館で参事官を務められています張梅先生は中華全国青年連合会、全青連の、派遣留学生として1999年本学に留学された本学の同窓生、皆さんの先輩であります。張梅先生は本学から帰国後、中国外交部、日本の外務省に当たる部署ですけれども、そこに異動され、アジア局一等書記として日中交流の最前線で活躍されてきました。特に中国のトップリーダーの日本の窓口として、数々の外交の舞台で重要な役割を任されてきました。2007年4月に温家宝首相が来日された際にも、通訳として同行されました。温家宝総理と創立者池田先生との会見でも、通訳として参加されています。2008年5月には胡錦濤国家主席の訪日にも同行されました。この胡錦濤国家主席の訪日は、当時の福田総理大臣との間で戦略的互惠関係の包括推進に関する日中共同声明が署名され、日中両国関係が新たな幕を開いた意義深いものとなりました。この時も、胡錦濤国家主席と池田先生との三回目となる会見が行われ、張梅先生がこちらもそのとき通訳をされています。このように、日中国交の第一線で、また、池田先生と中国要人との第一線で、長らく歴史の現場を通訳してこられました方であります。現在は、中国大使館の広報参事官として、両国の友好関係促進に尽力されています。本年は先ほど申しましたように、日中国交正常化提言50周年の意義ある年ですので、その意義を込めた講演会をお願いしましたら、大変ご多忙の中ですけれども、快く引き受けて今日は創価大学に来ていただきました。私も皆さんと一緒に日中国交の歴史と未来を学んでいきたいと思っております。張梅先生ご講演よろしく願いいたします。

---

Zhang Mei（中華人民共和国 駐日本国大使館 広報部参事官）

張梅：皆さんこんにちは。ただ今ご紹介をいただきました中国大使館の張梅と申します。私は実は先ほど先生もおっしゃったように、19年前、1999年の3月から2000年の3月まで創価大学で一年間、第29期生として留学をさせていただきました。あっという間に20年近くが過ぎてしまっていて、本当にそんなに時間がたっているのが信じられないくらいです。今日は大学に来てキャンパスをさきほど回ったんですけども、中央教育棟は当時まだなかったんですけども、池田記念講堂や教育学部は当時からありましたので、懐かしく思いました。本日、こんなに大勢の創大生の前で、このようにお話をすることができて本当に光栄に存じます。講演というよりは、皆さんと懇談という形で、最初は自分が話しますけれども、その後は、皆さんもし何かご質問がありましたら、どうぞご自由に出していただいて、皆さんとざっくばらんに、お話をさせていただきたいと思います。今年、池田名誉会長の中日国交正常化提言50周年であります。そして中日平和友好条約締結40周年でもあります。こういった節目の年に、創価大学で、みなさんとういうふうに交流できますことを大変光栄に存じます。中日国交がまだ正常化されていなかった時代に、池田名誉会長はさまざまな困難を乗り越えて、中日はこれから国交正常化すべきであるという非常に素晴らしい提言をされたということは、今考えてみると本当に大変尊敬すべきご決断であって、中国側も非常に池田名誉会長の提言のことを高く評価しております。中日国交正常化を推進する上で非常に重要な役割を果たされた方なのです。

私はいま、中国の外交部、日本でいえば外務省にあたるところで働いているんですが、実は外交部に入る前に、私は中国で一番大きな青年団体である中華全国青年連合会国際部で8年間仕事をしていました。創価大学、創価学会との縁は、そのときから結ばれました。当時は全青連の国際部と学会の青年部が定期交流の覚書を調印していました。その合意により、全青連は毎年、学会の青年部派遣の訪中団を受け入れます。同時に創価大学は、全青連の留学生を受け入れるという交流の合意がありました。私もそのおかげで、日本で、創価大学で一年留学することになりました。当時の私は実は、社会人として三年目だったんですけども、その間ほとんど外国に行くことはなく、数回くらい短い期間日本に出張を経験したことはありましたが、初めて海外で一人暮らしをしたのが創価大学への留学時代でした。私は今でもはっきり覚えています、中国研究会の皆さんが横断幕を掲げて周桜のところで待っていてくれました。「張梅先生熱烈歓迎」という横断幕を抱えて待ってくれました。私は、大いに感動しました。そのことは今でも、忘れることはできません。実は学会の皆さんとの交流は、留学の前にも何回かありました。というのは、代表団の相互派遣があります。全青連は、学会の青年部の交流のほかに、いくつかの日本の青年団体との交流をやっているんですけども、その中で一番勉強になる、勉強のできる代表団、訪日団というのは、学会の受け入れによる訪日団だったんです。なぜかと言うと、通常の訪日団は、日本に来て、表敬訪問に行き、懇談会を行い、日本の国会の見学とか、二重橋の観光とか多少観光のスケジュールも入れるんですけども、ただ学会の受け入れの代表団の時は、勉強のスケジュールばかりでした（笑）。本当にこの団を通じていろいろ勉強することができるんです。日本の各界の皆さんとお話ができて、代表団の派遣を通していろいろ勉強することができました。

大学時代、私はサンフラワーホールに住んでいました。非常に立派な留学生の寮でした。当時は中国からは三人留学生がいました。北京から二人、新疆ウイグル自治区からも一人留学生がいました。他に東南アジアあるいは欧米の国からも留学生がいました。そして創価大学は、留学生の皆さんがせっかく日本に来たのですから、いろいろ日本人あるいは日本社会に関する勉強をしてほしいということで、その寮に日本人の学生さんが六人、私たちと一緒に住んでおりました。その六人の日本人の女の子たちにも大変お世話になりました。年齢は私よりは下ですけども、本当に生活面でいろいろとお世話になりました。また、例えば休日あるいは大学の記念日の日に、いつも池田名誉会長が激励の言葉とかあるいはプレゼントを留学生のいるサンフラワーホールに届けて下さいました。そのときこの大学は本当に留学生、特に中国からの留学生を大事にしているんだなあと非常にありがたい気持ちでいっぱいでした。そして、何回か池田記念講堂で名誉会長の講演を聞いた大変貴重な経験もありました。

私は全青連を卒業して、外交部に異動しました。そのとき大変光栄なことに、中国の要人の日本語通訳をするようになりました。そしてもっと光栄なことに、胡錦濤主席、温家宝総理が訪日した際の名誉会長との会談の通訳をさせていただきました。目の前で先生がいらっしゃり、お言葉を聞いて深い感銘を受けながら、通訳の仕事をごんばっておりました。その中でも、今でも記憶に残っている大変貴重な思い出は、温家宝総理が訪日した際に、池田名誉会長と会見を行いました。その会見が始まってですね、双方が会見室に入って、腰をかけるそのときにですね、突然、池田名誉会長が「温家宝総理、本日は張梅さんという創価大学の留学生を通訳として日本に連れてきて下さりありがとうございます」という一言がありました。私は本当にびっくりしましたが、非常に大きな感動がありました。普通通訳というのは、あんまり存在感を示さないものなのですが突然、要人に自分の名前を提起されて、よく私のことを覚えていらっしゃるなど、そのとき本当に大きな感銘を受けました。若い時から結ばれた友情は一生涯、影響を与え続けることができると私は思います。ですから、皆さんもし、そういう機会がありましたら、ぜひ外国のいろんな方と交流して、友情を結んでいただけたらと思います。その友情が本当に自分の人生の、それから、将来ですね、ずっとその影響を与えたいと思います。私はいま、中国大使館で働いていますが、ご存知の通り、就任前は非常に大変な時期がありました。要するに、政府間の関係で、喧嘩はよくするんですけども、でも、青年交流をやっている、友好交流をやっている、やはりいろんな日本人の友人が、特に若い時からの友人がいてくれたおかげで、ずっと自分の心の中で、中日友好は必ず実現できると信じています。日本政府と当時関係が困難な時期に、ほとんど毎日ですね、申し入れたり、申し入れられたり、抗議したり抗議されたりという日々が続いたんですけども、でも自分の中で中日友好はあります、がんばればそれは実現できますというしっかりした信念がありました。それは青年時代からの積み重ねのおかげだと思います。

ここで、簡単に中日関係について、お話をさせていただきたいと思います。ご存知の通り、日本と中国は隣国であります。隣人を選ぶことはできますが、隣国を選択することはできません。中日は、いくら喧嘩しても関係が悪化しても、引越することはできないですから、自分の隣に

こういう国があるという現実をちゃんと認めて、その国と仲よくお付き合いをしなければならぬというのが中日の現実であります。しかも中日両国は、2000年の友好の歴史がありまして、その中の近代になって50年の不幸な歴史がありましたが、でも、この長年の歴史が証明するように、両国は仲よく付き合えば双方に利益をもたらすことができるんです。逆に戦えば、双方とも損をしてしまいます。これは歴史の中で何度も証明されてきました。そして中日双方は現実から見ても、政治だけではなく、私たちの日ごろの生活に直結する面から言っても、両国はおたがいににとって主要な貿易のパートナーであります。中国は一番たくさんの外国資本を日本からもらっているんです。同時に中国は、日本の主な海外の市場であります。双方の利益はしっかりと絡み合っていて、もちつもたれつの関係にあるということは、これは事実であると思います。また、国際社会全般からみても、人類社会はいま、経済のグローバル化という大きな流れにある中で中日は世界第2、第3の経済大国としてともに本地域、あるいは、世界の平和と発展を維持する重要な責任を担っております。同時に国際社会、あるいは、地域の国々からもそのことは期待をされています。私たちは、平和、友好、互惠、あとWINWINという道を歩んでいかなければなりません。つまり、両国にとって中日友好が、唯一の選択肢なのであります。私は日本語を勉強していてよく日本以外にも海外に出張や旅行に行ったりするのですが、英語がそこまで上手なわけではないので、海外に行って色々な国の人たちに囲まれて、たまに安心できないというか、不安感があるんですね。しかし、その場所に何人かの日本人が現れて、自分のわかる言葉をしゃべっている人がいると、ああ同じだな、同じくアジアの人なんだな、となんとなく安心感が湧いてきます。そういう経験が何度もありました。また、中日関係のもうひとつの特徴をお話します。中日関係の長期的あるいは健全的な発展を維持する上には、中日民間交流が大変重要な役割を果たしているということです。民間レベルの友好というのは、中日関係の非常に素晴らしい伝統であります。これは多分他の国同士の関係の中であまり見られないことかもしれないですけども、中日関係は国交樹立されていない時代に民間交流が本当に大きな役割を果たしていました。よく言われるのが、民を以て官を促すという言葉があります。当時は政府間の交流がなかった時代で、民間の方々が本当に大きな役割を果たしていました。中日国交正常化の実現も、その一つの大変重要な布石というか、きっかけはやはり民間交流が先にあったわけで民を以て官を促すという言葉のとおりだと思います。そして今年国交正常化、46周年ですけども、両国の各界の友好の方々が、本当に大変に大きな努力を払われて、両国の各分野の交流を協力して積極的に進め、両国の国民の相互理解と友情を育み両国関係の改善と発展のために大きな役割を果たされました。その中でももちろん創価学会は、日本の民間団体として中日民間交流の中で大変重要な役割を果たされた団体であります。名誉会長は以前何度か中国を訪問されましたが、その時必ず中国の要人が名誉会長と会見していました。

これは名誉会長の中日友好への貢献、あるいは創価学会の大きな貢献を大変重視されていることの現れであると思います。中日関係がどんな状況にあっても政治関係がよくても、よくない時でも、両国の民間の友好の重要性は、これは、いつになっても変わることはないと思います。こ

れからぜひ、両国の益々多くの方々が、この民間交流に関わっていただき、両国関係の友好を推進していく大きな力となりますよう、本当に切に望んでいます。ご参加の皆さん、大学、学会の皆さんも含めてぜひ、どんどん中日友好運動に加わっていただければと思います。

あともうひとつ中日関係について、中国政府の政策についてですが、中国はずっと日本という国を大変重要な近隣であると位置づけております。一貫して日本との関係を重視しており、両国が平和、友好、協力という両国関係の大きな方向性を永遠に堅持しなければならないとずっと主張しております。そして中国側は中日の戦略的互惠関係の発展に非常に大きな力を入れてがんばってまいりました。これは、中国の国の政策であって、中日の間に何かがおきたらこれが変わるといことは絶対にありません。皆さんが多分新聞あるいはニュースで見られたかもしれませんが、先日、中国で、中央外事工作会議が行われました。中国と日本は同じ漢字を使っているけれども全然違う意味になることがあります。工作という二文字だけを見ても、日本では、意味は異なりますが、中国では実は「仕事」あるいは「取り組み」という意味で、中央外事工作会議が行われました。その会議の中で、日本のマスコミも報道しましたが、中国が今後周辺国とどう付き合っていくかという方針が明らかになりました。それはすなわち周辺諸国と仲よく付き合っていくと、中国は世界第二位の経済大国になったのですが、まだまだ途上国であって、これから国を発展させていくには、平和で友好的な周辺環境がやはり必要だということで、周辺諸国と争うのではなくて仲よく付き合っていくという方針を堅持するということが明らかになりました。その中でももちろん日本は非常に大事な隣国ですから、日本と仲よく付き合わなければならないというのは中国の基本の方針であります。両国関係が困難な時期に陥った時も中国も中日関係の発展を実現するために、中日関係の発展の正しい方向を守るために、色々がんばって見ました。例えば両国の政治関係にご関心のある方はご存知かもしれませんが、2014年の11月当時は非常に両国関係が冷え込んだ時期でした。その時中日の間で四つの基本合意が達成されました。

基本合意の内容は、今両国関係の直面している問題、そのボトルネックというか、どうがんばっても解決は難しいような問題を解決する時に堅持する原則が決められました。特に当時は歴史問題とか、領土の問題が非常に緊迫していましたが、中日の四つの政治文書の原則をしっかりと堅持して、この問題を適切に処理すること、話し合い・協議・交渉を通じて解決をしていくということが双方の間で合意されました。こういった基本合意、また、中日の間の四つの政治文書を堅持さえすれば、両国関係は新しい方向に向かって発展することができるというのが当時の双方合意でした。いまの中日関係は、ご存知の通りこの間李克強総理が成功裏に日本を訪問しました。これは中国の総理の8年ぶりの公式訪問でしたが、前回は温家宝総理が2011年東日本大震災の後に日本に中日韓の首脳会議に出席すると同時に被災地にも訪問しました。そのとき以来8年ぶりの中国総理の訪日です。この訪問で皆さんは日ごろ日本のテレビあるいは新聞をご覧になったかどうかよくわからないですけども、非常に日本政府は今回の訪問を重視して、安倍総理はほぼすべてのスケジュールを同行してくださいました。特に北海道での全てのスケジュールに同行しました。最後の新千歳空港までの見送りまでして下さり、日本政府は非常に李克強総理の今回の

訪日を重視していました。この訪問でお互いの政治的な相互信頼を強化することができました。そして、これから実務協力を行い各分野の交流や協力を強化していくということが合意され、十項目の文章の覚書を調印することができました。さらに、人的、文化交流、人的往来を強化し、拡大していくということが合意されました。今両国政府はこの両首脳の間で達成された重要な合意を実行に移していけるよう今努力しているのですが、そのなかで非常に重要で、両国の協力が著しい分野は、一つは、ハイテク分野です。テレビでご覧になったかもしれませんが、李克強総理は北海道のトヨタ自動車の工場を見学しました。そのとき結構たくさん専門の質問をその場でして、いろいろ日本の自動車産業の発展や専門の技術のことについて尋ねました。中国は非常に日本のハイテク技術に興味を持っていて、これから協力する意欲があるということの表れであると私は思います。

今後、両国は革新対話メカニズムを作るということで合意しました。この中で知的財産権保護に関する対話も行うという申合わせがありました。気がついたのですが、日本のマスコミの報道で、例えば日本と中国はこういった分野の技術について協力していくとなると、いつも色々な雑音というか、反対の声があります。その反対の理由は何かと言うと、やはり日本と中国が協力したら日本の知的財産権が侵害されるのではないかという懸念があるようです。従って、今回の革新イノベーション対話のメカニズムの協力においても、両国の間で起きている知的財産権の保護に関する案件をこの対話の枠組みの中で処理をするということが合意されました。そしてもうひとつ、双方は第三国での市場における協力を行うということです。これは具体的には、ある東南アジアの国で一つのプロジェクトがあって、日本の企業と中国の企業、双方が受注していると、中日はこのプロジェクトで、日本がやるか中国がやるか両国は競争しているとよくこういうニュースが以前は多くありました。今回やはり中日は競争するのではなくそれぞれの長所を生かして第三国で協力をしたらどうかという合意であります。安倍総理も今回の李克強総理の訪日の際に、アジア地域において毎年インフラ施設の需要は金額にすると1.7万億ドルあるのですが、中日両国は、手を携えて協力すればこういった需要・ニーズを満たすことができるというお話をしました。安倍総理はまた、年内に訪中することが予定されていますが、自分の訪中の際に、できればその第三国での協力の第一回目のフォーラムを行いたいということで、すでに日本側はもちろん中国側も色々準備をしているところでもあります。これから基本的に双方の実務協力の方向と言えば、やはりこのふたつの分野が重点分野になってくのではないかと思います。

中日関係ですね、テレビをつけたら、新聞を開いてみたらよく、政治、外交、軍事の話題がどんどん出てくるので、多くの人が両国関係がいつも緊迫しているような感じを抱くのですが、なぜこういった関係になっているかということを考えると、表では両国の領土とか、歴史問題、あるいは海上での問題が原因になっているかもしれませんが、私は、やはりその裏を考えてみれば、国同士の微妙な心理が働いていると思います。例えばみなさんも考えてみて下さい、自分のクラスの中で、自分の成績が一番よくて、優等生だったところに、急に自分の隣に、クラスメイトで、自分より成績のいい学生が現れて自分がもうこの日から優等生じゃなくなってしまったら自分の

心の中でどう思うか、ということを考えてみればわかるかと思います。中日両国は本当は80年代に、非常に蜜月関係というか非常に仲が良かった時代がありました。当時日本の映画やたくさんテレビドラマが中国に輸出されて例えば有名な俳優の高倉健さんとか、中野良子さんとか栗原小巻さんが、非常に中国でも有名な方でありました。その有名な俳優さんたちを、知らない中国人がいなかったというほど、非常に日本の文化が、中国に入っていて、これは両国関係が非常に緊密になっていることの現われであるかと思います。二年くらい前に、高倉健さんが亡くなられて、日本国内もビッグニュースでしたが、中国でも大きなニュースになりました。当日の中国のCCTVの夜7時のニュースで高倉健さんが亡くなられ、中日の文化交流に大きく寄与した方であるというニュースが流れていました。そのぐらい、80年代は両国関係が非常にいい状態がありました。なぜ今のようになっているかといいますと、やはり中国の経済の発展が原因になっているんじゃないかなと思います。先の例で、自分より成績のいい人が現れてきたら、この人とどう付き合っていくのかわからなくなる心理が働いたと私は思います。急に、日本の隣に国土も広いし、人口も多いし、こんな大きな国があらわれて、もう自分が世界でも第2位から第3位になってしまい、アジアにおいてどうなるかもわからないという状況になってしまって、その国とこれからどう付き合っていけばいいかわからない、その微妙な心理が、働いて、色々な摩擦が起きてしまうと思います。普段、そういうことがなければ、摩擦にならないかもしれませんが、こういう心理が働いているのですから、色々な日中の間の矛盾や対立が起きてしまいました。私はやはり双方は、対立については先程申し上げたように、四つの政治文書が大事になってきます。その中で非常に重要な内容は、お互い、相手のことを協力のパートナーとし、お互いが脅威とはならない、そして、お互いに相手の平和発展を支持するということです。こういう政治文書に決められた言葉通りに双方が行動できれば、色々な中日の間にある問題を解決することが、私はできると思います。

これは中国側の一方的な押し付けということではなく、日本側と合意しているんですから、ちゃんとこの合意を行動にもっていくということは、これから中日のいろんな問題を解決するうえで大きな意義があると思います。いまは非常によくなりましたが、特に李克強総理の訪日以来です。私は広報担当ですから、日本のマスコミと日頃から会い、いろいろお話すること、あるいは日本の新聞、テレビが中国に関して何を報道しているか確認することが、確認するという言い方は少しおかしいかもしれませんが、それが私の仕事の一部です。よく、以前は、日本の総理大臣あるいは外務大臣が海外に行く際、その海外訪問を報道する時に日本のマスコミは、安倍総理はヨーロッパの訪問を予定し、フランス、ドイツの総理と経済あるいは経済保障などについて話し合いをすることになっているが、それは中国の発展をけん制するための協議だといった内容の報道がありました。日本のマスコミにはこのような傾向がありましたが、幸いなことに李克強総理の訪日以来、日本のマスコミも中国のマスコミも、ようやく両国の間の政治、外交、軍事以外のいろんな分野の交流や協力を目を向けるようになりました。非常にありがたいことであると思います。

近年、両国の国民の交流は、非常に速いスピードでどんどん発展をしております。特に去年は、両国関係が好転してきて、去年一年間で、735万人が中国から観光のために日本にきました。香港と、台湾を含めればですね、中国全体の観光客は、日本を訪れた外国観光客の半分以上を占めています。そのような大きな数字があるんですね。それと比べると多少日本人の中国に行く人数は少ないです。去年の数字は268万人だった上にその中の八割はビジネスである人たちです。観光のために中国に遊びに行きたいという人は二割しかいませんでした。これは少し残念なことであり、これからはぜひ、どんどん、たくさんの日本人の方々、特に若いみなさんが、中国においてなることを望んでおります。

この間、私は日本の人事院研修所、社会人一年生の公務員たちの研修をする所へ行きこういう形で交流をしたんですけども、聴いてみたらほとんどの人は中国に行ったことがありませんでした。これは中央省庁の人、つまり、外務省とか厚生労働省、あるいは経産省、公務員の方々なんですけども、ほとんど九割は中国に行ったことがないんですね。こんなに近い国なのに、行ったことがないということは本当に残念です。逆に中国からどんどん日本への観光客、増えています。私は週末にたまたま銀座のデパートに買い物に行くんですけども、地下一階、地下二階、一階かな、化粧品売場で化粧品を国内の友達に頼まれて買いに行ったんですね。そうしましたら、お支払いをする時に、番号札が必要です。順番待ちをするんです。番号の書いている紙を渡されてから、並ぶ場所をみてみたら全部中国語を話す人たちなんですね。中国からの観光客です。銀座の三越でしたっけ。非常に中国の観光客が多いですね。仕事で日本人の方と夜食事を一緒にすることがありますが、あるとき上野のてんぶらやさんですかね、仕事の関係で日本人の方と一緒に食事をしました。そのお店は非常に面白いお店で、毎日一テーブルしかやっていないんです。年配のおばあちゃんがやっているところで、上は自宅、下はお店という珍しい、珍しいというかユニークなてんぶらがおいしいお店です。雑談をしてみたらそのおばあさんが、数日前、中国人の女の子一人、リュックを持って、やってきました。ただ、ちょうどその日はそのお店の休みの日だったんです。でもその女の子がノックして、どうしても今日はここで食べたいのでわざわざ来ましたと言います。なんでこんな狭い店をあなたは知っているの？と聞いてみたら、SNSで調べて、ここのてんぶらやさんがおいしいと知ったのでどうしても今日はこのお店で食べたいと。その話におばあさんは驚いて感動していてじゃあやりましょうということで、非常に面白い話を聞きました。SNSというのは従来のマスコミよりは非常に大きな力があるみたいですね。中国人はネットで、日本のいいところ、おいしいお店を探しているんです。私は、東京に来る前に、実は大阪にある大阪総領事館で一年半くらい勤務しました。関西も中国からの観光客が多い場所です。よく奈良に行ってみたら、奈良の街は鹿がいつも自由に散歩してるんじゃないですか。鹿注意という道路標識もあるんですけども、たくさんの中国の若者の新婚さんが、ウェディングドレスの写真を奈良に行って撮るんです。中国で写真屋さんをやっている中国人もたくさんいますが、日本で今度鹿と一緒にウェディングドレスを撮りたいというお客さん向けの業務が広がっている写真屋さんも増えています。そういう状況になっているらしいんですね。あるいはいまの中



国の若者ですね。彼らの中には日本に来たらツアーに参加するのではなく、先程私が言った数字は基本的に旅行者のツアーをベースに統計をしているんですけども、自分でいろいろネットで調べて自由に観光するという方が多いです。皆さんが行くところは、以前思っていた伝統的な観光地、たとえば東京タワーとか上野公園とか二重橋とかそういうところではなく、日本人の普段生活をしている場所です。たとえば、春になったらバラのお花が5月に咲くんじゃないですか。中国からの観光客は都電の荒川線を見に行きます。5月になったらバラの花がたくさん咲いていて、都電荒川線電車が来ていてバラの花があって非常にきれいな風景の写真を撮れます。中国からの皆さんそこに行くんです。あるいは鎌倉ですね、アジサイと列車と一緒に写っている場所を見たいということで、これまでの観光のコンセプトとは違う、日本人が普段どういう生活をしているのかを見たいのです。あるいは、京都に行ったら、舞妓さんの衣装を着て歩いている人がいるじゃないですか。あれは基本的に八割が中国人です。お金を払ってあれを着て、日本の文化を体験したい、写真を撮りたい、というのが今の中国の若者の日本旅行のスタイルですね。私は大阪で勤務し、その後、九州の福岡総領事館で二年勤務していました。熊本大学に中国学友会があるんです。その会長と副会長が卒業をして一度上海に戻り、また日本にやってきました。何をしに戻ってきたかと言うと、大阪で家を二軒買って、ホームステイを始めました。民泊を始めました。大学を卒業したばかりの20代の若い夫婦です。このように中国からの若者が、日本を理解したい、日本を知りたい、日本の文化、あるいは日本人の普段の生活のスタイルに興味を持つようになり、どんどん日本に対する理解を深めているようです。ぜひ、これからは皆さんも含めて、もっと多くの日本人の若者の皆さんも中国に行っていただきたいと思います。

以前は日本からけっこうたくさんの方が中国に行っていました。そのあと両国関係が緊張して、一時期ストップしたことがあるんですけども、ストップの原因を尋ねてみたら、ひとつは政治関係があまりよくないから中国はこわいということ、もうひとつは中国のPM2.5が心配であるということが言われました。中国に行った日本人から言われた話ですけども、行く前は中国のイメージと言えばパンダ、自転車、でも一度行ってみたら、ああ、これは日本とそんなに変わらないんじゃないかな。特に北京や上海は全然日本とは変わらないじゃないですかと。道に迷ってしまい、周りの人に助けを求めようとしたら、もう親切に道を教えてくれて、日本とあんまり変わらない国であると。何回か言われたことがあるんです。ぜひ、皆さんがそういったチャンスがあれば、がんばって行っていただきたいと思います。

今日は中日友好と青年の使命というテーマですから、青年の皆さんに対する期待を述べさせていただきますと思います。一つは、独立して独自に判断する能力をぜひ持っていただきたいと思います。なぜかと言うと、やはり中日関係を例にしてみるとですね、十年くらい前、当時は小泉総理が在任中で、毎年靖国神社に参拝に行っていて、両国関係はこの問題で非常に困難な時期にありました。そのとき小泉総理がよく言っていたのは、中国から反対であると言われているから行かないわけにはいかない。中国に言われているから参拝しないというのは絶対だめだというようなお話があったんですね。当時、日本のテレビで、テレビ局の人が街に出てインタビューをし

たんですね。小泉総理の靖国参拝をどうみるかというようなインタビューでした。私は見えていて驚いたのは、ほぼすべての人たちは、中国が反対しているから行かないというのはぜったいダメという、小泉総理が言っているのと同じようなことを言っていました。中国の若い皆さんはですね、わりと自分の頭で物事を判断する傾向が強いですね。マスコミがそう言っているから信じてしまうというわけじゃないです。マスコミの報道が偏る時はよくあるんです。それは日本のマスコミだけではなく中国のマスコミもそういう傾向がときどきあるんですね。中国の CCTV でよく将軍、軍人経験者の人を迎えて、中日関係について議論する番組が以前よくありました。でも、中日関係の全般をわからない人があれを見たら、明日にも中日はもしかしたら戦争するんじゃないかというような誤解を与えてしまうようなことは何度もありました。日本のマスコミもそうなんですね。視聴者の皆さん、特に若い方々は、あれを見て、つい信じてしまうという時がよくあるんですね。私はやはり、若い皆さんは自分の判断で、自分の経験で、あるいは自分が体験したことで、物事を判断していただきたい。本当のことはどうなっているのかということ、本当にマスコミが報道していることはこのことの全体像であるかどうか、それをぜひ考えていただきたいと思います。私はよく日本のマスコミの人に言うんですけども、中日の間でいろんな分野でいろんなレベルの人たちががんばっているんです。中日友好協力、交流をがんばっているんです。なぜあなたたちはそのがんばっているところに目を向けられないんですか、なぜいつも問題が起きてしまったらそのマイナスな部分ばかり報道するのですかと。もちろんこれはマスコミの特徴ですけども、でも、両国関係を発展していく上でマスコミは非常に重要な役割を果たしているんです。だから中日全般のことにぜひ、目を向けていただきたいと。また、中国の PM2.5 は非常に高い数値になっていると報道しますね。でも、ある期間は青空の日が増えていきます。でもそれを全然報道しない。悪化したら報道します。青空になったら報道しない。それはマスコミの傾向ですね。私はよく言うんですけども、中国は、たしかにいろいろ深刻な問題に直面しています。まだまだ途上国です。一人あたりの GDP は日本と比べて、まだまだ少ない。日本は 4 万ドルですが中国はまだ 8 千ドルですね。非常に大きな差があるんです。中国は日本の経済力に追いつくまで、あと 20 年 30 年必要です。いま、中国は日本を越えて豊かな国になっているか。絶対そうじゃありません。よく考えてみたら、まだまだ中国は日本と仲よく付き合い、日本からいろんなことを学んで、両国で一緒にがんばっていく必要があると。中国にはまだまだ日本が必要であるというのが私の持論です。

でも中国政府はちゃんと措置を講じているんです。ちゃんと考えているんです。講じている措置は短い間に効果が出てくるかもしれないです。でも効果が出てこない場合もあるんです。でも、それをマスコミはちゃんと報じてほしいと思い私は日頃仕事の一部としてがんばっています。若い皆さんもぜひ自分で独自に判断する能力をもっていただきたいと思います。

あともう一つ、目の前の一言、二言だけで自分の判断が左右されるんじゃなくて、長い目を持って、ものごとを考えていただきたいということを私は皆さんにお勧めしたいと思います。中国大使館が行っている取り組みの一つですが、中国の文化あるいは中国の社会、あるいは中国人が

普段どんな生活を送っているかということをもっとたくさんの方の日本人の方に知ってもらうために、代々木公園で、チャイナフェスティバルをやります。今年は9月8日、9日、大変光栄なことに、9月8日はちょうど名誉会長の提言50周年の記念日です。その同じ日に代々木公園で朝10時から夜7時までチャイナフェスティバルをやります。中国の芸術団がやってきます。ブースも100くらいあって、飲食、物販、展示があります。他にも企画コーナー、パンダハウスとか中日のカラオケ大会、中日の卓球大会など、いろいろ企画もやっています。ぜひみなさん足を運んでいただければと思います。以上、ざっくばらんにお話をさせていただきました。皆さんのほうから何かご質問があればぜひ、おっしゃってください。ありがとうございました。

司会：張梅先生大変にありがとうございました。それでは、なにか質問があれば挙手して下さい。

質問1：今日は大変貴重な講演ありがとうございました。教育学部4年生です。張梅先生が話してくださったなかで、日中の関係が非常に緊迫した関係になってしまっているその背景についてですが、その微妙な心理状態を乗り越えるためには、今話してくださった、若い私たちが独自に判断する能力を持つということと長い視野を持つということが非常に重要なのかなと感じたんですが、その能力を身につけるためには、私たち日本の学生が、身につけなければいけないこと、学ぶべきことはなんだと思われませんか。

張梅：質問ありがとうございます。やはり、視野を広げることですね。私は日本に来てもう5年が過ぎましたが、日本の若者の皆さんが海外に行くことはどんどん少なくなっているようです。中国に行かないだけでなく他の国にも行かないという傾向になりつつあるんですね。やはりいろんな国、いろんな文化と接触をして、体験をして、自分とは違う思想がある、違う価値観あるいは文化、生活、習慣があるということをちゃんと知っていただいたら、自分の将来、末永い人生に大いに役立つんじゃないかと思います。それから、中日関係の微妙な心理を克服するには、やはり長い視点でお互いのことを協力のパートナーとみなすということが非常に大事です。相手はライバルではなく協力のパートナーであり、一緒に手を組めば、一緒に発展することができるという信念をぜひ固めていただければということですね。李克強総理の訪日の際に安倍総理は40周年記念のレセプションですばらしいお話をされていました。それは、中日は、今日から競争から協調の新時代に入ると、両国が手を組めば、できないことはないということをおっしゃっていました。これは今の中日関係に一番必要なことじゃないかなと私は思います。

質問2：本日は貴重なお話ありがとうございました。経営学部1年生です。私の友達で、外交官になりたいという人がいるのですが、国際関係の仕事をしていく上で、学生時代にやっておけばよかったなということ、やっていてよかったなということを教えていただければ嬉しいです。

張梅：外交官になるには、何を勉強すればよいかということですが、国際関係、国際政治の勉強

はもちろん必要ですけども、私も実は大学のときの専門は日本語だったんです。中国と日本はちょっと違うんですね。日本の外務省は、基本的に外国語を勉強した人を外務省に入れるというのではなくて、いろんな分野を学んだ人を外務省に入れるんですね。入った後に、例えばこの人は将来中国に関することをやるということになったらこの人を中国に派遣します。二年、三年、留学させて、語学の習得をさせます。中国は基本的に外国語を勉強する人が、外交と関係のある仕事をやるようになるんですね。私は日本のやり方のほうが、わりと健全であると思うんです。外交官は、外国語だけを勉強しているのでは足りないんですね。その意味で、やはり一つは、視野を広げることですね。目先のことだけじゃなくて、歴史を勉強することも大事です。外交というのはよく妥協の芸術といわれるんですが、自分の利益だけを獲得して、相手が損をする、これは外交じゃないです。外交は必ず、お互いに妥協して、双方がWINWINにならないと成り立たないんですね。やはりそれを達成するために、柔軟性の育成が必要じゃないかなと思います。

質問3:ご講演ありがとうございました。教育学部3年です。張梅さんからみて、創立者のすごさ、偉大さをどのように感じられたのかということをお伺いしたいと思います。

張梅：私は社会人になる前から、池田名誉会長のことを知っておりました。北京大学が私の母校ですけども、当時から創価学会と交流がありました。学会の代表団が北京大学を訪問していて、自分はまだ一年生、二年生でしたが、先輩方あるいは先生方と学会の皆さんとの交流を隣で勉強させていただきました。全青連に入って、創価学会青年部と毎年定期交流をやってましたが、何回か光栄なことに、名誉会長が全青連の派遣の代表団に会っていただきました。そのときから先生のおっしゃっていたお言葉、また、先生の思想を勉強するようになりました。池田名誉会長が中国、あるいは中国人に尊敬されている理由はなによりも中日友好へのご貢献です。よく中国の人民日報とか CCTV が先生に関する報道をするときに、中国人民が非常に尊敬をしている古き友人でいらっしゃるというような評価がされます。まだ国交正常化がなかった時代に、まわりからいろんな反対、あるいは抗議の声がありました。中国との国交正常化反対というような声がありました。でも、そのなかで先生はいろんな困難を乗り越えて、何としても中日は国交正常化しなければならないということを強く訴えられました。そんなことをできる人物はそんなにいないんですね。私はよく先生と中国要人の会見の時に同席をしていて、やはり本当に先生の頭のなかには全世界のことがあると思いました。日本あるいは中国のことだけではなく、世界の歴史、現在、将来、国際情勢の流れについて、はっきりした判断、あるいは若者がものごとを判断していく上で非常に役に立つ素晴らしい思想がありました。これからまだまだ私もさらに、勉強をしなければならないところがあると思います。近年、中日関係が非常に紆余曲折の道をたどってきました。靖国の問題、また島の問題で、両国関係がギクシャクしていました。その中で、先生のご指導のもとにある創価学会は、以前と変わらず、中日友好を堅持し、両国は話し合いによって解決すべきであり、両国は平和的にお付き合いをすべきであるということはずっと主張し続けてこられま

した。これは日本社会全般の両国関係に関する雰囲気の中で非常にありがたいことです。中国の皆さん方にとって中日関係を発展するうえで本当に心強い存在でございます。

質問4：貴重な講演ありがとうございました。理工学部4年生です。この授業は創価教育論という授業で、創価教育について学んできました。中国の教育と創価教育とは違うと思うんですけども、実際に中国の大学で勉強された後、日本に来て創価大学で勉強されたと思うんですけども、中国の教育と日本の教育、特に創価教育との違いや、実際に創価大学で勉強されて、なにかこの創価教育について感じたところ、驚きなどありましたらぜひ教えていただきたいと思います。

張梅：中国と日本との教育の違いのところですが、日本の教育は個性の育成は大事にしているんですね。学生さん、生徒の皆さんお一人一人の主張、自由に物事を考える、その創造力の育成、中国よりはこの面のことを大事にしているんじゃないかと思うんですね。中国は進学教育が強く、特に近年は、いい学校に行きたくても資源が限られているんですね。競争の中で敗れないために週末も休日も塾に行行って勉強する。もう幼稚園の頃から勉強が始まっているんですね。その学生は将来の進学のために非常に重い負担を負っているんですね。でも、これもやむをえないことであって、日本はそれと比べるとそれほど緊迫した状態ではないかもしれません。私は大使館の中の自分の同僚が、子どもを日本の現地の小学校に置いて、中国に戻ると、結構たくさんの方が心配するんですね。たとえば小学生四年生で中国に戻ると基本的に三年生からやり直す人が多いんです。そうでないと、もうついていけないんです。どんどん勉強のレベルはアップしてるのですが、でも日本では、たとえば小学一年生の皆さんは本当にすくすくと元気に育っているんですね。毎日気持ちよく遊びながら勉強している。私は教育を研究したことはないですから、創価教育論も20年前はない授業ですから、あえてコメントをすることはできないんですけども、ただ、ひとつ当時留学をして創価大学で感じたことのひとつに、非常に外国からの留学生のことを大事にしているんです。皆さんは感じないかもしれないんですけども、私は一外国人として、外国の留学生として非常に強く感じるんです。他人とは違うような行動をとらないというのは日本人の基本的な特徴ですけども、日本人がほとんどの中で5%しかない留学生の他者はどうなるかというと、私は全然一度も不愉快な思いはしなかったんです。非常に温かく見守っていただいて、周りの日本人の学生、先生方、あるいは寮に一緒にいた日本人の六人の学生、管理人の方、私たちは、おかあさんとおとうさんと呼んでいたんですけども、自分の本当の日本の親のように仲よく付き合っていて、生活上で自分が悪いことしたら叱られることもよくありました。こういう非常に親しい関係でした。創価大学は留学生のことを大事にしている、特に中国からの留学生は非常に大事にされていて、本当に温かい気持ちで、創価大学で一年留学することができました。創価教育の理論についてはまた、これから勉強させていただきたいと思います。

質問5：貴重な講演ありがとうございました。文学部1年生です。日本人の中国に対するマイナ

スイメージを払拭するには、何が一番ベストと張梅さんは考えますか。

張梅:やはり交流ですね。交流しないと相手がどんな人であるか、相手の国がどんな国であるか、行ってみないとわからないですから。直接交流することが非常に重要です。この間、日本の議員の皆さんとの懇談会の機会がありました。その日本の方から言われた話に、両国関係に影響を与える重要な要素が二つあるんです。一つは政治家、総理大臣、中国の国家主席、総理のハイレベルの往来が、そのトーンを定めるんですね。両国関係の雰囲気がこの間の李克強総理の訪日によってだいぶよくなったということもそのひとつの表れですね。あともう一つはマスコミで、マスコミが相手の国のことをどう報道するかは、非常に重要です。さっき申し上げたように、全面的、客観的に報道することが大事です。やはり先ほど私が申し上げたように独自に判断すること、あるいは長い視野をもつこと、いろいろ見て判断をすることですね。他の国、人の言っていることを聴くだけでなく、どうしてもマスコミの報道は偏ってしまうんですから、やはり自分で確かめないと、本当のことはわからないと思います。

司会:では、本日の特別講演を終了したいと思います。大変にありがとうございました。